

2019/02/10

『ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。2 ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にははならないことを、あなたたちはするのか」と言った。3 イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。4 神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」5 そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」6 また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。7 律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。8 イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。9 そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」10 そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。11 ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。』

【説教】

今日の聖書の言葉は、「安息日」ということに関することが記されています。安息日というのは、神さまが与えて下さった大変特別な聖なる日のことです。1週間の内、他の6日の日々と区別して、安息日は私たち人間にとってとても特別な日であります。どういった意味で特別なのかといいますと、それは働くこと、労働することから解放される時なのです。立場の違いにかかわらず、たとえ雇われているという立場の弱い人であっても、何かと家事や雑事を一手に押しつけられているというような人でも、皆平等に働くことから免除される日です。神さまは、私たち人間の心や体がとても弱いということをよくご存じです。疲れてすぎてしまわないように、命がすり減って行かないように、7日の内の最低1日は休めるようにと休息をくださいました。

この安息日をくださった神さまのお姿は、従業員を心から大切にしている雇い主に例えられると思います。良い雇い主の関心事は、事業で利益を上げることだけではありません。そこで働く従業員の生きる喜びや幸福を願う事も、とても大切なことです。無理して働かせて体を壊したり、心を病んでしまったりさせることは、雇い主の望むところではありません。「あの雇い主は従業員を奴隷のようにこき使って使えなくなったら捨ててしまう残酷な人だ」と言われることが、最も恥ずべきことでもあります。その代わりに、「あそこの事業所に勤めている人はうらやましいな。自分もあんな風に大切に扱われたらどんなにいいだろう」。そう言われることこそ、良い雇い主の誉であります。どの人であっても、神さまが一人ひとりを大切にその命を守られていること。このことが知れ渡ることこそ、神さまの御

栄光を現すことなのですね。ですから安息日というのは、神さまがいかに慈しみ深く愛にあふれているのかということ、人々に告げ知らせる特別な日なのだと思います。「神さまが、私を、弱くて心がしぼんでなえてしまっているこの私を、振り返りてくださった。」その喜びを賛美し、祈りにして神さまの慈しみに応える日なのですね。

そのような安息日ではありましたが、この聖書箇所ではイエスさまと意見を異にする人々が登場しています。それは、ファリサイ派の人々と律法学者たちです。彼らも安息日を神さまが与えて下さった特別な聖なる日だと、そのことはイエスさまと同じように考えていました。と言うよりもですね、あまりにも大切にしすぎてしまい、「これはどうなのだろうか？」とかなり行き過ぎてしまうということを熱心に行っていました。彼らはイエスさまの弟子たちが安息日に麦畑を通った時に麦の穂を積んだことを、強い調子で咎めました。これは麦の収穫をするという労働と、そして麦の脱穀をするという労働をしたのだと捉えたからです。働くことを禁止した安息日の規定に違反したということで、その過ちを責め立てたのだということですね。こういう風に責められてしまったら、イエスさまの弟子たちはそこに居場所がなかったと思います。「みんなが安息日は特別だからちゃんとその決まりを守ろうとしているのに、自分がそれを台無しにしてしまった。」そのように、とっても恥ずかしく思ったかもしれません。とても心から安心して、そこで休むということは出来なかったでしょう。

しかし、どうでしょうか。イエスさまの弟子たちはそこまで責められるようなひどい過ちを、本当に犯したのでしょうか。安息日にしてはならないことというのは、本当はどのようなことなのでしょう。そのことを考えさせられる出来事だと思います。たとえ小さい事でも決まりは決まりだから、必ず守らなくてはいけないという考え方もあります。その一方で、なるべくお互いに多目に見ることで、とにかく大切なことは安心して恐れなく、安息日の神さまのお招きを喜ぶようにしようという考え方もあります。信仰ということを考えるときに、実はここで起こっているようなことが、私たちの身近なところで結構同じようなことをしてしまっていることがあるかもしれませんね。信仰というのは、本来は命が回復することを願って行うことです。しかし反対に信仰をすることが返って私たちの心を縛って圧迫し、命をすり減らしてしまうものになってしまうことがあるのです。まさに、自分が何をしているのかわからない状態に陥ることがあるのだということです。イエスさまは、熱心のあまり信仰のあり方が本末転倒してしまっている彼らに対して、ダビデという信仰の模範となる人の例をここであげています。本来祭司しか食べてはいけないと決められていた供え物のパンを、空腹で飢えて苦しんでいるときには、ダビデもその規定に違反して食べたではないかということですね。

神さまが「何々をしてはいけない」とそのように戒めを与えられるのは、私たち人間の命を守るためです。目の前に飢えて苦しんでいる人がいたら、その人のつらさを分かち合い、パンを分け与える事の方がずっと神さまのその御心の中心に沿っているのではないかと、そうイエスさまは言いたいわけですね。確かに、いたずらにルールを破って勝手なことをしているならば、それは注意されても仕方ないと思います。その程度において、時にはあまりにもそれが酷かったら、たとえ恥をかかせることになったとしても互いに戒め合うことも必要なときはあるでしょう。それでもやはり、それぞれが抱える人生の重荷を、安心して下ろすことの出来る安全な場所とすることが、安息日が聖なる日であることの基本です。安息日にしてはいけないことが何であるのか、十分よく考えて行動しなくてはいい

ないと思います。

これは、もう一つのほうの話も同じことがいえます。イエスさまはやはり、安息日に手の萎えた(麻痺していた)人の病を、お癒しになられました。これも治療という労働でありますから、ファリサイ派や律法学者の人々は安息日の規定に背いたとイエスさまを責め立てました。彼らは、安息日には何を一番に大切にすべきなのか、そのところでイエスさまと異なっていました。彼らが文字通りに労働をしないということに従順であろうとする代わりに、イエスさまはその文字の中身ですね。その神の言葉の中心にある慈しみに対して、イエスさまは従順であられようとなされます。それぞれが疲れを覚えて、日々の大変さの重荷を下ろそうと安息日にみな集まって来ます。その中で一番重い荷物を持っている人がいたら、とりわけその人に配慮し一番のねぎらいの声をかけるのはごく自然なことだと思います。それはまさに慈しみ深く、一人ひとりを大切に考えてくださる神さまの愛に沿った行動であるはずです。

この手が萎えていた人がどういう生活をしていたのか、そのことを伝える伝承(伝説であり確かかどうかはわかりません)が残されています。新約聖書よりも少し時代の降ったそれでも同時代の文章になりますが、「ヘブライ人の福音書」という文章にこの手の萎えた人のことが記されています。それによりますと、この人は石を細工する職人でありましたが、利き腕が動かなくなったために職を失いました。それからは物乞いをして暮らさなくてはならず、この人の生活がいかに大変なものであったのか現代の私たちにも容易に想像することが出来ると思います。神さまの憐れみにすぎるように安息日に訪れたこの人の心の苦しみが、イエスさまの目には痛いほどわかりました。何はさておき、この人の悲しみを受け止めて慰めることを、神さまにその苦しみを執り成すことを、イエスさまは一番に優先されたのです。必要ならばたとえ安息日であっても、隣人の命を救うために働くことは、大きな意味で神さまの戒めに背いたことには決してならないとそう考えられていたのでしょうか。むしろ目の前に大きな人生の重荷を背負って苦しんでいる手の萎えた人を見ているにもかかわらず、そこに特に関心を払わないことの方が、安息日の意図からずれてしまっていますね。安息日の規定に違反しているかいないか、そのことが最も大きな関心事になっている心のあり方こそ、実は他者の命を(そして自分の命も)滅ぼしていることになっているのではないかとイエスさまはおっしゃりたいわけです。それは悪を行うことであり、それこそ「安息日にゆるされていないこと」なのではないかと、そうおっしゃりたいのですね。安息日に招かれたどんな人であっても、大切にいたわり回復することこそ、最も大切な神さまの関心事です。そのことに目を向けてほしいと願い、抵抗があることを承知で思い切って命をかけて、ここでイエスさまは癒しの業を行われました。ファリサイ派と律法学者たちは、予想通り怒り狂って素直にこのことを聞くことが出来ませんでした。このことが、返ってイエスさまの言葉や振る舞いに対して、どう応えれば良いのかを教えてくださいたいと思います。

安息日に、礼拝に、緊張することなく、恐れることなく、癒しや回復を求めて来ているのであれば、それはもう本当にイエスさまの言葉を素直に聞いていることのしるしだと言えるでしょう。そして、その安心して恐れなく喜ぶ安息日に集う人々の姿は、そのまま神さまの御栄光をよく現している光景であります。背負っている人生の重荷が重ければ重い人ほど、大切にいたわれるその安息日の風景こそ、キリスト者や教会が世界に放つ世の光となるのだと思います。